

上映映画解説

1956, 10

国立近代美術館 フィルム・ライブラリー



No. 44

路傍の石

「路傍の石」鑑賞会について

フィルム・ライブラリーの特別鑑賞会では、歴史的な価値のある芸術性豊かな古典映画をとり上げてきましたが、今回はその第二回として、一〇月一〇日から二八日まで、毎週二回（日・水曜日の二時）田坂具隆監督の日活映画「路傍の石」を上映します。

路傍の石 一四巻

文部省・日活多摩川共同一九三八年作品

—— スタッフ ——

原作……………山本有三

脚色……………荒牧芳郎
高重屋四郎

監督……………田坂具隆

撮影……………伊佐山三郎
碧川道夫
永塚一栄

考証……………森永健次郎

—— キャスト ——

先生次野立夫……………小杉 勇

愛川吾一……………片山 明彦

父庄吉……………山本礼三郎

母おれん……………滝花 久子

福谷麻太郎……………三島 鉄男

父伊勢屋喜兵衛……………吉井 堯象

母お糸……………三井 智恵

妹おぬい……………星 美千子

番頭 忠助……………星 美千子

番頭……………尾崎 輔

稲葉屋黒子泰吉……………井染 四郎

母おせい……………吉田 一子
栗村鏡造……………須田 大三

山田咲二……………飛田喜佐夫

勝ちゃん……………青木 虎夫

仕立屋 河銀……………井上 敏正

染物屋 京屋……………上代 勇吉

近所の内儀さん……………藤村 昌子

駅長……………西 春彦

踏切番……………鈴木三右衛門

久美田住江……………沢村 貞子

妹 加津子……………松平富美子

画学生 熊方信義……………江川宇礼雄

△解説▽

この映画は、文部省と日活多摩川の共同企画により朝日新聞に当時連載された山本有三の小説「路傍の石」から、昭和十三年に映画化されたもので、監督は田坂具隆です。脚色は荒牧芳郎と高重屋四郎（田坂具隆のペンネーム）、撮影は現在まで田坂と名コンビの伊佐山三郎が主に担当しています。

封切は、昭和十三年九月二一日、浅草富士館、帝都座、神田・麻布・渋谷の日活館で行なわれ、可成りの好評を博して同年度キネマ旬報ベスト・テンの第二位を得ました。

近作「女中ッ子」で健在を示した田坂具隆は、助監督時代に、村田実、溝口健二、鈴木健作らの指導を受け、大正一五年処女作「かぼちゃ騒動記」を発表、トオキイには「春と娘（昭和七年）」等を作ったが、「路傍の石」の前年昭和十二年に、すでに山本有三の「真実一路」を映画化しています。昭和十三年には、「路傍の石」に先立ち、「五人の斥候兵（同年度ベスト1）」を発表し、この年のベスト・テンに二位二位を独占し、第一線監督としての名声を獲得しました。「路傍の石」は彼の代表作であるばかりでなく、昭和一〇年前後に流行した文芸作品映画化の典型的な作例の一つ

といえましょう。

原作が有名なので内容については、詳しく述べる必要がないと思いますが、栃木県下のある町、日露戦争直前の明治三五、六年頃、貧苦の中に生れながら、さかんな向学心に燃える少年愛川吾一が、辛酸を重ねながら、やがて上京する物語で、二部に分かれています。なお、今回上映のプリントは文部省に保存されていたものです。

「路傍の石」とその周囲

清水 晶

この映画が作られたのは昭和十三年、そしてこれはタイトルにあるように、文部省と日活の共同企画ということになっている。文部省は、それまでも映画製作のために毎年若干の予算を計上し、小規模なプロダクションに委嘱していくつかの「教育的」映画を製作して来たが、この年初めてAクラスの会社と二つの作品の共同企画を試みた。その一つは東宝との「長曾根虎徹」で、もう一つはこの日活との「路傍の石」である。前者ではまんまと失敗したが、後者では前者の失敗を償ってあまりあるだけの賞賛を博した。昭和十三年といえ、日華事変すでに二年目であるが、昭和十四年に実施を見た映画法もまだなく、内閣情報局が映画統制の座に我がもの顔におさまる以前であるから、こうした官庁と第一級の製作会社との共同企画ということも珍しかった。これが映画法以後になると、今から考えれば、日本映画の全作品が情報局との共同企画になってしまったようなものであった。

それはともかくとして、この映画の原作は、その頃朝日新聞に連載されて評判になった山本有三のもので、監督に当たった田坂具隆は、この前年にも、同じ山本有三の「真実一路」を映画化して好評を得ている。

当時の日活は経済的には裁判所の管理を受けるという一種の破産状態にありながら、阪妻、千恵蔵、寛寿郎の三大剣戟スターを擁する伝統の時代劇王国の京都撮影所に対し、現代劇の多摩川撮影所は、所長根岸寛一の英断によって一部の巨匠に対しては徹底的な大作主義、芸術主義をとり、そこから映画史を飾るいくたの名作が輩出したが、その反面、それらの超Aクラス作品以外はCクラス作品ばかりで、中間層がなく、それもスタッフの名前を一見しただけで一目瞭然という、いびつな状態を生み出した。その巨匠の列に属するものが、内田吐夢や田坂具隆、途中で東宝に引移った熊谷久虎の三人で、内田吐夢の「人生劇場」(昭11)「裸の町」(昭12)「限りなき前進」(同)「土」(昭14)、田坂具隆の「真実一路」(昭12)「五人の斥候兵」(昭13)「路傍の石」(同)「土と兵隊」(昭14)、熊谷久虎の「情熱の詩人啄木」(昭11)「蒼嵐」(昭12)が、映画史上を飾る超Aクラスの傑作大作である。これが内田吐夢の「歴史」(昭15)に至って、その興行的不振からそれまでの大作主義に再検討の鞭が加えられ、そのときはすでに根岸寛一は所長の椅子になく、この方針転換を機会に、内田、田坂の兩名の日活脱退となって、多摩川のほとりに何年か燃えさかった特異な芸術的炬火も消えてしまうことになるのである。

ところで、当時の田坂具隆に対する評価は——「女中ッ子」などで代表される現在でもさうだが——誠実そのもののような作家ということに一致していた。山本有三の「真実一路」の映画化に成功したのも、有文学の持っている誠実なヒューマニズムと田坂の誠実な演出態度に、たぶんに共通するものがあり、それが原作本来の香気を過不足なくスクリーンに伝えたという点にあったと思われるが、それはこの「路傍の石」に対してでもそっくりそのまま当てはまることである。

それに、やはり「真実一路」でデビューした見るからに利口で勝負な片山明彦少年が、内田吐夢の「限りなき前進」を経て、すっかり名子役としての磨きをかけたことは、この映画の成功にどれだけ大きな役割を果たしたかわからない。彼が封筒を貼り間違えて、そっと涙を拭うシーンなどは、二十年近くたった今日でもいまだに忘れられることが出来ない感激的なものであった。

そのかわり、この映画は、田坂監督のいいところも百パーセント出ている反面、悪いところも出ていないではない。いつも誠実が過ぎて人一倍長尺になりがちな彼の癖は、この映画を、延々二時間以上もかかって吾一ただ一人の立志伝的足跡を追うだけで、それも中途半端な時期で終わっている。明治の風俗描写は丹念でも、吾一をとりまく人物は、要するに吾一の側からのみ見た一面的な姿ばかりで、そこに明治の社会の本質が立体的に描破されているとは言えない。それでも、この映画を見た当時、私の感動は大きかった。それは、いってみれば、私たちが子供の頃からさんさんに吹きこまれて来た修身教育的立志談の、最も生々と肉付けされた形をここに見たからである。ジャーナリズムもこそって絶賛し、その年のベスト・テンでは第二位の栄誉が与えられた。ところが、これがつい先年松竹で再映画化されたときは、往年の十分の一の話題もまき起さなかった。それは、実際に映画の出来栄が前作より格段に劣っていたためか、それとも、この作の持っているモラルそのものが今日の時勢にそぐわないものとなってしまったためか、それを判断していただけに、今度の上映はいい機会である。

(フィルム・ライブラリー運営委員)